

宮沢賢治の四次元空間

ザベレジナヤ・オリガ

論文構成

- 第四次の定義
- 大正時代の日本で広がった四次元空間の理解
- 宮沢賢治の第四次元についての言及と理解
- 第四次が現れる場面とキーワード（透明、風、雲、森、電車、修羅）
- 宮沢賢治の文学における第四次元概念の意義や用途

導入

宮沢賢治の詩や童話に難解なものが多く、様々な解釈が可能である。その理由の一つは、賢治がもう一次元が加わった四次元空間という不思議な世界を作品に取り入れたためであろう。

本研究は宮沢の第四次を中心とした包括的なアプローチを提案する。

研究プロジェクトの目的は第四次元の世界を探り、宮沢賢治研究やその作品の翻訳にあたって新たな可能性を広げることである。

定義

第四次元空間とは、三次元世界（我がいる普通の世界）にもう一次元（時間）が加わった、現実と想像の界にある理想の世界、またはその世界にアクセスできる日常意識を超えた特別の意識状態である。

第四次空間の特徴：

- 時間が相対的なものである
- 死んだ人と再会できる、幽霊の世界とつながる
- ものが分子になり真空に戻り、また真空から生まれ新しい形をとる
- すべての存在が幸せになれる
- 子供、農民、世間から離れた、自然に近い無邪気な存在しか入れない

先行研究

宮沢による第四次元の言及は8ヶ所しかないが、概念の重要性は多くの研究者によって指摘されてきた。

第四次元説

第四次元 = 時間（恩田逸夫、西田良子）

四次元空間 = イハートブ (Hagiwara T.)

四次元空間 = ヘテロトピア (Kilpatrick H.)

四次元空間 = 「遊び」の世界（菊池良夫）

四次元空間 = 龍樹の「空」（佐藤伸郎）

分子や意識の流れ

四次元空間では、ものが最小単位である分子（原子、電子、モノイド、アトム、微塵、細胞などとも言い換えられている）に分解し、また新しい形をとる。その過程が意識の流れであり、四次元空間の元となる動きである。

黒と白との細胞のあらゆる順列をつくり

それをばその細胞がその細胞自身として感じてみて

それが意識の流れであり

〔黒と白との細胞のあらゆる順列をつくり〕

透明な現象

宮沢の透明なもの（桜の木、鳥、石など）の多くは普段の世界に透き通っていない。また、抽象的な現象（エネルギー、音、解析）も透明である。普段見えないものが見えてくるのは、もう一つの次元によって視野が広がるからである。

すきとほつてゆれてゐるのは

さつきの剽悍な四本のさくら

わたくしはそれを知つてゐるけれども

眼にははつきり見てゐない

たしかにわたくしの感官の外で

（小岩井農場）

議論の問題

1. 四次元空間はどこにあるか。
A. 意識の中 B. 外部の世界
2. 四次元空間はどの世界に属しているか。
A. この世界の一部 B. この世界とは別の世界（異空間）

最後に一言重ねますれば

今日の投票を得たる花には

一も完成されたるものがないのであります

完成されざるがままにそは次次に分解し

すでに今夕は花もその瓣の尖端を酸素に冒され

茲数日のうちには消えると思はれますが

すでに今日まで第四次限のなかに

可成な軌跡を刻み来つたものであります

（ダリヤ品評会席上）

見たまへこれら古い時代の数十の頬は

あるひは解き得ぬわらひを湛え

あるひは解き得てあまりに熱い情熱を

その細やかな眼にも移して

褐色タイルの方室のなか

茶いろなラグの壁上に

巨きな四次の軌跡をのぞく

（浮世絵展覧会印象）

結論

第四次は大正時代の科学・哲学・仏教の思想が賢治の世界観を通して生まれた概念である。意識の中の世界でありながら、岩手との共通点も多い。

宮沢の世界にもものが不思議な性質を持ち、消えたり、現れたり、自由に入れ替わったりするのは四次元空間の中にあるためである。賢治が頻りに作品に取り入れた「透明」なもの、「風」、「森」、「電車」などが物語がそのヒントを与える。

したがって、宮沢の文学を解釈する、または翻訳する作業にあたって、物語りが四次元空間でその約束によって発展していくのを考慮すれば、ストーリーや表象の解釈ができるようになり、謎の現象や行動の一部の理解につながるだろう。

第四次元の電車

電車の多くは第四次の世界に入る手段であり、普段の世界と四次元空間をつなぐ例も少なくない。

こちらは全線の終列車

シグナルもタブレットもあつたもんでなく

とび乗りのできないやつは乗せないし

とび降りぐらゐやれないものは

もうどこまででも連れて行って

北極あたりの大避暑市でおろしたり

銀河の発電所や西のちぢれた鉛の雲の鉱山あたり

（岩手軽便鉄道 七月（ジャズ））